

# バイオリン 作者不詳 クレモナ工房、約 1650 年

このバイオリンは、スフォルツェスコ城の全てのコレクションの中でも間違いなく最も重要なものである。

楽器に付いているラベル紙には「アンドレア・ガルネーリ製作／クレモナ1630年」と印刷されているが、これは全く疑わしい。

本当の作者は、はっきりとは解っていないが、おそらくニコロ・アマティの工房（アンドレア・ガルネーリもこの工房に所属していた）で製作されたものと思われる。しかし、更に正確に確認するための科学的証拠となる資料に欠けている。バイオリンの場合には、その音色のおかげで尊重されることがよくあるように、この楽器もまた、何世紀にも渡って演奏され続け、音楽家の要求の変化に合わせていくつか改良されている。クレモナ市のクラシック弦楽器職人が製作した楽器の多くは、19世紀にミラノで改良されている。それは、古い腸弦を使用したものよりも更に音量のあるものにするためには、新しい金属弦を張らなければならない、その張力を支えるためには、内部を補強し補強板も指板も取り替える必要があったからである。

共鳴板は品質の良い二枚のモミ材で、美しい波形が見える（見た目に好ましい特徴ある木目）横板は18世紀の弦楽器製作者がしばしば使用したロンバルディア平原によくあるポプラ材である。バックは、これも波形の板目のあるカエデの一枚板である。

渦巻きのような先端部はヘッドと呼ばれ、オリジナルではないが、18世紀初期のミラノ工房の楽器から取られ

た物で、「PB」の頭文字が刻まれている。組み込み接合されていない外側補強とゾケット（内部を構成する特殊な板）はポプラ材で、おそらく修理されたのであろう。

貫禄あるオリジナル塗装が見えるのは、バックと横板のいくつかの部分にすぎないが、美しい金色を帯びたオレンジ色をしている。

バイオリンは様々な機会に修理され、少なくとも三人の手に託されたものとみられる。特にバックは、キクイムシの被害を受けたために内側のカエデ材で補修されている。バックの先の右側上方もノッチェッタも、そしてゾケットの下の部分にあたる横板の一部も作り直された。共鳴板は最も手を加えられた部分である。左上の部分は完全に取り替えられ、右下の縁も取り替えられ、内部は共鳴板中央の全長に渡って一面を補強で被い、貼付けされた。最後の修復は、1989年にクレモナ市のアミゲッティ工房で行なわれた。

共鳴板内部にはエンピツで書かれた二つの書き込みがある。「1921年ローラン修復」と「ブリュッセル1921年ローラン・アルベル修復」。そしてまた共鳴板と共鳴孔の上方にあたる部分に二つ「A.ローラン」の

小さな焼印がある。

注目すべき美しさと歴史的価値のあるこの楽器は、それに加えて、正に並外れた特徴ある響きで音楽家達からたいへん尊重されている。1989年に修復された後、この楽器はクザーノやロビーギヤクリロフやバリアーニなど一流のバイオリン奏者の録音やコンサートで活躍している。

